

平成 30 年度

# 理工系学生のための東アジア短期派遣プログラム

ーグローバルマインドを持った人材の育成ー



大阪大学大学院工学研究科  
国際交流推進センター

平成 30 年度

## 目次

1	はじめに	2
2	プログラムの趣旨・目的	2
3	参加学生および教員	3
4	学生の選抜および事前オリエンテーション	3
5	研修スケジュール	4
6	研修報告	
6.1	国立清華大学	5
6.2	香港科学術大学	6
7	研修成果	7
8	研修参加学生による報告	8

## 1. はじめに

平成 31 年 2 月 26 日（火）～ 3 月 2 日（土）にかけて、大阪大学 CAREN プログラムおよび大阪大学未来基金（ Takeda Works ）からの助成金により、「理工系学生のための東アジア短期派遣プログラム ―グローバルマインドを持った人材の育成―」を実施した。本稿は研修の趣旨・目的から成果までを報告する。

## 2. 本研修プログラムの趣旨・目的

近年日本へ留学する外国人が増加している。その総数が 2018 年にほぼ 30 万人に達する一方で、海外留学・インターンシップをする日本人学生の数は 2000 年以降減少か、ほぼ横ばいの状態が続いている<sup>[1]</sup>。この不均衡の原因は最近の日本人学生の内向き志向もあるが、費用面の問題が一番大きい<sup>[2]</sup>。また、研究および教育分野において中国など東アジア諸国の大学の存在感が急速に増している。そこで、CAREN および大阪大学未来基金 (Takeda Works) の支援により学生達に東アジア諸国の世界トップレベルの大学にて短期滞在させて現地の学生・教職員と交流することにより、海外への目を開かせること、またこれらの大学との学生交流を活発化させることを本研修プログラムの目的とする。

具体的には本学と大学間交流協定を締結している台湾の国立清華大学と香港の香港科学技術大学<sup>[3]</sup>および関連施設を訪問する。両大学の研究室訪問や施設見学、学生交流、産業・文化体験を通して、急速に発展を遂げているアジア諸国では現在何が起きているのか、なぜアジア諸国が世界の注目を集めているのかを現地で五感をフル活用し、その地域に触れることでより理解を深め、グローバルな視野を広げる事を目的とする。また、本研修プログラムだけで完結するのではなく、このプログラムを経験することで参加学生の中から将来の中・長期の留学を行う学生を出すこと、最終的には世界で活躍する国際的な研究人材を育成するための呼び水になることが目的である。

[1]2018 年 1 月 18 日 文部科学省「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学  
者数」等について [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm)

[2]2018 年 3 月 大阪大学大学院工学研究科 国際交流推進センター報告書「国際交流たより」第 43 号

[3]国立清華大学および香港科学技術大学（香港科技大）はどちらも台湾および香港における理工系のトップ大学の一つである。国立清華大学は台湾のシリコンバレーと呼ばれる新竹市にあり、人文系を含む 9 つの学部からなる総合大学である。QS ランキングは世界 163 位。香港科技大は香港の理工系大学で 1991 年の設立ながら欧米式の大学運営と、一流大学出身の教員を多数有することにより、世界のトップ大学の一つとして認められている。QS ランキングは世界 37 位。大阪大学の QS ランキングは世界 67 位。

### 3. 参加学生および教員

本プログラムには以下の選抜された4名の学生および3名の教職員が参加した。

[参加学生]

- 中田渡月（地球総合学科 学部1年）
- 出戸克尚（環境・エネルギー工学科 学部2年）
- 花木愛子（応用理工学科 学部3年）
- 山田桂吾（大学院地球総合工学専攻 博士前期1年）

[教職員]

- 藤田清士（国際交流推進センター センター長 教授）
- 寺井智之（国際交流推進センター 講師）
- 野尻郁子（国際交流推進センター 特任事務職員）

### 4. 学生の選抜および事前オリエンテーション

本研修プログラムに8名の学生が応募してきた。これらの学生の提出した志望理由書に対して志望動機の明確さおよび研修の効果が期待されるかどうかの観点から5名の教員により採点を行い、上位4名の学生を選抜した。

選抜された学生に対して国際交流推進センターにおいて2回の事前オリエンテーションを行った。初回のオリエンテーションでは本研修の趣旨および目的についてレクチャーを行い、合わせて渡航に必要な書類（パスポート、履歴書、成績証明、海外旅行保険、OSSMA登録に関する書類）の準備について指示をした。

2回目のオリエンテーションでは準備させた書類の確認および現地での注意事項（服装、訪問先大学などで振る舞い等）について教育した。

## 5. 研修スケジュール

2019/2/26 : 出発日

09:25	JL813 関空発⇒台湾 11:40 着
11:40-13:00	大学の方と会い次第、ゲストハウスへ向かう
13:00-13:20	ゲストハウス「清華会館」到着、荷物を預ける
13:30-14:00	大学紹介
14:00-16:00	専攻の紹介
16:00-17:30	キャンパスツアー
18:00	夕食
夜	市内見学等

2019/02/27 : 国立清華大學 訪問日

09:00-11:00	専攻・研究室訪問
11:00-12:30	学生交流
12:30-14:00	ランチタイム
14:20-15:20	Science Park Exploration Museum
15:20-16:20	Glass Museum of Hsinchu City
16:30-17:30	Visit Chenghuang Temple
18:00	夕食

2019/02/28 : 移動日

08:50	C1641 台湾発⇒10:55 香港着
	ホテル名 : ホリデイ・イン エクスプレス カオルーン イースト
ホテル到着後	市内見学、文化体験等

2019/03/01 : 香港科学技術大学 訪問日

09:50	香港技術大学 Entrance Piazza に集合
10:00 -10:30	大学紹介
10:30 -11:00	土木工学 教授陣と Meeting
10:30 -11:00	機械・宇宙工学 教授陣と Meeting
11:00-12:00	両専攻の研究室訪問
12:00- 13:30	TBC にて香港科技大教員および日本人留学生とランチ

2019/03/02 : 帰国日

10:10	JL7068 香港発⇒14:45 関空到着
-------	-----------------------

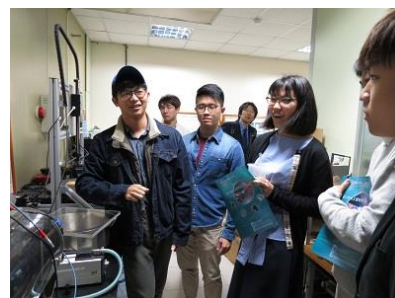
## 6. 研修報告

### 6. 1 国立清華大学

最初に台湾の国立清華大学におけるプログラムのアレンジをして頂いた工学部の国際交流オフィスの Chen Hsin-Lung 教授と Alison Chen 女史を表敬訪問した。まず、お互いに国立清華大学工学部と大阪大学工学部/大学院工学研究科の概要説明を行った後、台湾と日本における留学事情について意見交換を行い、最後に歓迎セレモニーを行った。その後、Graduate Program of Advanced Energy (先進能源學程)、Department of Industrial Engineering and Engineering Management (工業工程與工程管理學系)、Department of Power Mechanical Engineering Office of International Affairs (動力機械工程學系)の3つの専攻・プログラムを訪問し、各専攻・プログラムの教員から概要の説明を受けた後に研究室を見学した。いずれの専攻・プログラムにおいても英語で授業を受けることが出来ることを強調された。参加学生達は最初こそ遠慮がちであったが、研究室見学では説明を担当する学生達に積極的に質問をし、お互いの学生生活などについても率直な話をする事ができた。

工学部の訪問後は、教育学部の日本語専攻学生達の案内で図書館見学とキャンパスツアーを行った。清華大学の最新のAV技術を用いた図書館の設備に驚くとともに広大なキャンパスに散在する歴史的な庭園、モニュメントなどを見て回るうちに学生達はお互いにすっかり打ち解け、キャンパスツアー後の夕食も一緒に取った。

2日目は Department of Materials Science and Engineering(材料科學工程學系)、Department of Chemical Engineering(化學工程學系)、Graduate Molecular Engineering Program(分子工程學程)の3つの専攻・プログラムを訪問した。最初に訪れた Department of Materials Science and Engineering では、会議室で専攻の教員と学生達とでお互いの研究について英語で意見交換を行った。引率教員の一人である寺井講師が大阪大学のマテリアル生産科学専攻出身であることもあり、議論が大いに盛り上がり、予定の時間を越えて議論が続いた。また、参加学生達もたくさん発言をし、逆に台湾人学生の方が、教員達が質問を促しても全く手が挙がらず、台湾側教員が困惑するシーンもあった。次に訪問した2つの専攻・プログラムのうち Graduate Molecular Engineering Program では日本人教員である堀江正樹教授の研究室を訪問し、日本人が海外の大学でポジションを維持し続けることの大変さについて貴重な話を聞くことができた。専攻・プログラムの見学後は、清華大学工学部から選ばれた4名の学生と大阪大学の4名の学生がそれぞれ準備してきた約10分のプレゼンテーションを行った。台湾側の学生は日本人とのハーフの学生や日本語が堪能な学生がいたこと



もあり、お互いの研究・学生生活について活発でかつ忌憚のない議論を行うことができた。

昼食後は、清華大学のキャンパスが存在する新竹市内の Science Park Exploration Museum と Glass Museum of Hsinchu City を見学した。Science Park Exploration Museum は新竹市のサイエンスパーク内にあり、近隣のベンチャー企業の発明・開発した製品などが展示されていた。展示内容も公的な産業博物館というよりは日本の大手企業が社内に併設している企業ミュージアムに近い内容であった。次に見学した Glass Museum of Hsinchu City は新竹市の名産であるガラスを使った芸術作品と日本植民地時代からのガラス産業の歴史がわかる博物館であり、建物も日本植民地時代のものを改修してそのまま使っている。学生達は一つ一つの作品を見学し、芸術鑑賞と台湾産業史の一側面の勉強をした。



## 6. 2 香港科学技術大学

香港科技大の訪問は約半日と短かったが濃密なものとなった。まず、Associate Dean of Engineering の Richard So 教授らを表敬訪問して香港科技大の概要について説明を受けた。香港科技大は設立 30 年にも満たない若い大学にもかかわらず、世界的なトップ大学として評価されている。その理由が研究成果もさることながら、徹底した国際化にある。So 教授らの説明によると学部生の 40%を毎年海外へ派遣させており、海外からも優秀な留学生を積極的に受け入れているとのことであった。ただ残念なことに日本人学生は優秀であるとの評価を受けながらも、香港科技大へ留学する日本人学生は極めて少数であるとのことであった。



その後、4名の学生は2名ずつ Department of Civil and Environmental Engineering(土木工学専攻)と Department of Mechanical and Aerospace Engineering(航空宇宙工学専攻)に分かれて各専攻の教授達と面談し、大学院課程の授業内容や研究生活について質疑応答を行った。さらに、参加学生のうち出戸と花木は個別で Prof. Jidong Zhao と個人面談を行った。その間、教職員と残りの学生達は両専攻の研究室・実験設備を訪問した。Department of Civil and Environmental Engineering では参加学生の山田が地球総合工学専攻で土木工学を専攻しており、実験装置の説明をする学生達にたくさんの質問を行い、専門的な議論を行った。



研究室見学の後は学内のレストランにおいて香港科

技大の教職員 3 名および日本人学生 3 名と阪大側 7 名で昼食を取った。参加学生達は海外で学んでいる日本人学生に大変興味を持ち、彼らがなぜ海外で学ぼうと思ったのか、留学して困ったことや良かったこと、また海外で留学するための細かいノウハウなどを予定の時間を大幅に超えて話し続けていた。

## 7. 研修成果

本研修プログラムの目的である、参加学生に刺激を与えて海外への目を開かせる、さらには中・長期の留学へ結び付けるという目的は十分に達成されたと考えられる。数日間の短い期間ではあったが参加学生達は各自の英語力に関係なく、常に積極的に質問や発言、議論を行っており、現地大学に多数の友人も作って帰国した。そのパフォーマンスは現地側の大学からも大変高く評価され、現地側大学への留学を勧誘された。さらに、帰国後 2 名がより長期の留学を希望し、うち 1 名が今春より行われる国立清華大学のサマースクール（2 カ月）に参加申し込みを行った。また、研修中に行った教員間の協議により、国立清華大学との間では停滞しているダブルディグリープログラムの締結手続きの再加速、香港科学技術大学との間では香港側学生の派遣に関する具体的な議論が行われた。これらの成果を無駄にせず、さらに拡張するため本研修プログラムを継続することが必要である。



## 8. 研修参加学生による報告

大学院工学研究科 地球総合工学専攻社会基盤工学コース 1年

山田 桂吾

私が東アジア短期派遣プログラムに参加するにあたって目的とした事は、大きく分けて二つあり、一つは台湾・香港の大学での取り組みについて、日本の大学や自分の学生生活と比較しながら学ぶことです。私がまず知りたいと思った事は、台湾・香港の大学が、大学としての価値を高めるために、重要視している事や、力を注いでいる事です。それらを知る事によって、台湾・香港で学ぶ学生が何を大学に求めているのか、キャリアを形成する上で何を重要視しているのかが分かると思いました。また研究室訪問などを通して、台湾・香港の大学では、どのような研究が行われており、学生や研究者がどのように取り組んでいるのか知りたいと思いました。その中で、日本と台湾・香港の研究活動の違いを知ることで、自分の大阪大学での研究活動において、改善すべき部分を知り、今後の研究活動をより充実したものにしたいと考えました。また私は台湾・香港を訪れるのが初めてだったため、現地の学生との交流や観光を通して、学業以外の文化や生活についても、日本と台湾・香港の違いを学び、自分の価値観を広くしたいと考えました。二つ目は、国籍などのバックグラウンドの異なる人とのコミュニケーションについて学ぶことです。自身の今までの人生を振り返ると、海外生活や留学の経験が無いので、比較的自分と近いバックグラウンドを持った人とのコミュニケーションが多かったと感じます。特に大学院の研究活動では、限られた分野の研究者や、学生との交流が多く、非常に狭い世界で活動していると感じます。しかし、私の専攻する土木分野、特にインフラ整備に関わる仕事は、今後発展途上国などの海外での事業が主戦場になると予想されるため、何らかの形で海外での事業に携わる機会が訪れると考えています。そのため、英語を使って文化や考え方の異なる人とコミュニケーションをとることが、自分にどれくらいできるのかを知りたいと思いました。さらに、コミュニケーションをとる上で、どのような問題点があるかを知り、残された学生生活の中で、改善に取り組みたいと考えました。

本プログラムでは、台湾国立清華大学と香港科学技術大学を訪れ、研究室訪問や現地の学生との交流、英語でのプレゼンテーションなど、様々な経験をすることができました。その中で、研究者の方々による大学や専攻の紹介、質疑を通して、国立清華大学と香港科学技術大学について理解を深めることができました。特に印象に残っている事は、両大学ではインターナショナルな環境が非常に充実しているということです。両大学では、学生が国外で挑戦することを後押しするだけでなく、逆に外部からも積極的に学生の受け入れを行っており、学生への金銭的な援助も充実していると感じました。そのため、日本の大学とは根本的に門戸の広さが違うと感じました。またそのような環境で学ぶ学生は、海外志向が強い人が多く、将来のキャリアを明確なイメージとして持っていると感じました。私は学部生の時には、自分がどのようなキャリアを歩みたいか考えたことが無く、周りに流されて大学院に進学したため、非常に頭が下がる思いでした。一方で研究活動に関しては、学生の研究に対する取り組み方や、研究のための設備の充実度は日本と両大学との間に大きな差があるとは感じませんでした。また私

が専攻しているシビルエンジニアリングの地盤工学の研究室を訪れた際には、日本で一般的に扱われている機器が多くあり、英語で行われた実験設備の説明もある程度理解できたので、普段英語論文を読み込んでいることが活かされたことに嬉しく思いました。次に、英語でのコミュニケーションについてですが、現地の学生との交流を通して、英語を聞くこと、話すこと、共にこれまでの人生の中でも、最も多く経験できたと思います。私は英語が得意でない上に、普段の生活でも英語でコミュニケーションをとる機会がほとんど無いため、プログラムに参加する前は大きな不安がありました。しかし、現地では相手の発言が一回で聞き取れない時には、何度か聞き返すなど時間をかけることで、何とか最低限のコミュニケーションをとることができたと思います。また、リスニングと発言の回数を重ねるにつれて、英語に対する抵抗が小さくなっていくことを感じました。ただ、会話の中で、相手の発言を日本語に訳して理解するので精一杯で、相手の発言の意図を深く理解することは難しく感じました。その問題を解決するためには、当たり前ですが、普段から英語でコミュニケーションをとれる環境が大切だと痛感しました。

本プログラムの体験を通して、台湾・香港の大学と日本の大学の違いを想像以上に感じることができました。特に国際的な環境という観点では、台湾・香港の大学の積極的な姿勢や、取り組みから学ぶべき所が多くあると感じました。さらに、学生の学業への取り組み方についても、ほとんどの学生は、幼少期から英語などの他言語の習得に力を入れていて、さらに英語ができることによって将来のキャリアを幅広く考えることができるという、好循環が生まれる環境があると感じました。また、台湾・香港の大学では、学生生活の中で、英語がスタンダードに用いられており、自分の大阪大学における学生生活や研究活動が世界的に見て、特異なものであるという事を自覚することができ、危機感を感じました。以上より、自分の価値観を広げることができたと言えるため、非常に有意義な研修になったと考えます。また英語でのコミュニケーションも、回数を重ねることができ、多くの収穫を得ることができました。英語で伝えたくても、伝えられないもどかしさを感じる場面は多々ありましたが、徐々に英語でコミュニケーションをとることにに対する抵抗が小さくなっていき、下手な英語でも伝える気持ちが大切であると身を以て感じることができました。これは日本に居て体感することは難しいと思うので、大きな収穫であったと思います。

最後に、本プログラムで得た貴重な経験を、今後の学生生活、および将来のキャリアに生かしたいと考えています。私は将来的に土木技術者として、発展途上国のインフラ整備などのプロジェクトに携わりたいと考えているので、普段の研究活動の中でも、常に視野を広く持って物事をとらえる事を意識することと、英語の習得にも力を入れたいと思います。残念ながら、修士課程が終わるまでに残された学生生活は1年ほどしかありませんが、自身の研究に打ち込むだけでなく、将来的なキャリアのためになると思ったことには積極的に取り組み、より充実した学生生活にしたいと考えています。

## 1. 研修に応募した動機と目的

昨年海外からいらした教授のセミナーを受講し、将来国際的に活躍するためには学部生のうちから様々な場所に行き文化や考え方を肌で感じる大切だと学んだ。特に今回訪問した台湾を含む中国は今後の日本社会を考えたときに切っても切れない関係にある国である。このため実際に中国という国を自分自身の目で見てくるのが大切であると考えた。また私は将来的にアジアまたはヨーロッパの大学に留学したいと考えていて留学先を探すにあたって日本で得られる情報には限りがある。この研修において研究室を実際に訪問し雰囲気を感じられることが魅力だと感じた。また、特に今回訪問する国立清華大学は私が専攻している材料系分野に歴史をもつ大学であり、同じ研究分野で将来競い合っていくライバルたちと交流できることが4年生以降の研究生活のモチベーションになると考えた。この研修を通じて自分の視野を広げるとともに今後の留学先を決めるための参考にしたいと思いこの研修に参加した。

## 2. 現地で体験したことと活動内容、感じたこと

初め二日間は台湾国立清華大学に訪問した。清華大学ではまず一日目は機械系学科の説明を聞き実際にどのような研究設備で研究しているかなどを清華大学の学生さんに紹介していただいた。私自身今年の4月から研究室に配属されるため日本との研究室との違いを感じながら見学した。例えば研究室の組織体系が日本と異なっていることを知った。日本は教授、准教授をはじめとする数人の先生方と生徒が十数名と比較的大人数のグループで研究室が成り立っているが清華大学は先生1人に対して数名の生徒が付き研究を進めていくスタイルであった。組織形態一つとってもかなり異なっていることを初めて知った。また、研究内容の説明をしていただきどんな些細な質問でも丁寧に答えていただいて私自身も将来していく研究内容などを英語で正しく答えていく練習もしていかなければならないと感じた。また研究室見学後は大学の設備見学をさせていただいた。一番驚いたことは図書館の設備である。様々な本があるだけでなく生徒のための設備例えばサークル活動のための小ホールやリラックスのためのミニシアターがあったことに驚いた。またスポーツにかなり力を入れていて様々なスポーツを楽しんでいた。また夜には生徒さんに清華大学近くの屋台やスーパーに連れて行ってもらい、ローカルな台湾の雰囲気を味わうことができた。二日目はまず私の専攻分野である材料系の説明や化学系の説明を聞いた。大阪大学でカバーしている研究内容とは少し違う視点から研究を進めている研究室などもあってとても興味深かった。そのあとは清華大学の学生さん4人と交流した。まず初めにスライドを用いて各大学の学生全員が自己紹介をした。清華大学のどの学生さんのプレゼンも日本人の学生に比べてリラックスした感じで説明していて場数を踏むことがとても重要だと思った。私も彼らに負けないように英語で伝える練習をし

ていくことが重要だと感じた。またそのあとは新竹市の科学館や台湾独特の建築様式の寺院や屋台街を訪問した。科学館では新竹市で発展している技術を用いたデバイスなどを見学した。実際にどのような機会に用いられているかなどを知ることができた。また、寺院や屋台街では台湾の独特の雰囲気を感じられた。実際に清華大の学生に台湾のおすすめの食べ物などを紹介してもらい食べさせていただいた。どの食べ物も非常においしくまた現地の人も優しくてとても貴重な経験ができた。

台湾の次の日は香港に訪問した。一日目は大学訪問の予定がなかったため学生だけで台湾の学生に教えていただいた香港の有名な観光スポットを訪問した。日本との雰囲気の違いに圧倒され THE 香港という摩天楼や夜景に感動した。香港二日目は香港科技大学に訪問させていただいた。ここでは全体の説明やなぜ歴史の浅い大学がランキング上位になったかなどを教わった。やはり国際化というのが非常に重要なキーになることを痛感した。また、ここでは地盤を専門としている教授に説明を聞き日本で起こった地震がこのように海外の研究者の研究テーマになっているのかと驚いた。自分の国のことであるのに他国の方が詳しくわかっているという事実に悔しいなという気持ちがわいた。また、ランチではどのような目標をもって学生生活を送るべきか、また留学するために気を付けたほうがいいことなどを教わった。香港科技大学の訪問は非常に短い時間であったため大学の魅力について清華大学ほどは感じられなかったのが少し残念だと思った。しかし香港科技大学では日本人学生としか交流できなかったが日本人だからこそ思うところなどを少し聞けて非常に参考になった。

### 3. 研修から得られた気づきと将来的な目標や夢にどうつなげるか

今回実際に台湾、香港を訪問してみて得られたことはまず英語は単なるコミュニケーションツールだということを感じた。英語をしゃべれるようになって初めて意思疎通ができ、自分の研究内容のアピールが可能になると思った。日本人は英語の読み書きは得意だがしゃべることに焦点を置くとまだまだ他のアジアの国の学生に圧倒されてしまいこれからのグローバル化されていく世界を考えたときに遅れを取ってしまう危険があると肌で感じた。また、言語の壁により日本でも同じ分野でさらにレベルの高い研究をしているにも関わらずその成果を発信しきれていないことが課題だと感じた。

今回の研修をきっかけに台湾の国立清華大学に短期(約 2 か月)の留学をさせていただくことになり、この研修に参加したおかげで新たなスタートを切ることができると予感している。またこの経験を通じて私の将来の夢であるグローバルな視点から物事を考えていける研究者もしくはエンジニアになるための一つのチェックポイントとして頑張っていきたいと思っている。またこの研修をきっかけに得られた人とのつながりを大切に、今後世界中を舞台に活躍できる仕事に就くためのネットワークを大切にしたいと思う。

### 1. 研修に応募した動機と目的

最初は、このまま普通に授業を受けて特にそれ以外せずに大学生活を終えていくことに物足りなさがあり、それまでの自分が持っていない視野や世界を得ることで、今後の大学生活で自分が進むべき道が何か、考えるいいきっかけになると思ったためです。また、英語をもっと話せるようになりたいという思いもあり、今回の研修は自分にとって、両方の目的を達成できるチャンスだと思ったからです。

### 2. 現地で体験したこと活動内容、感じたこと

台湾では、様々な大学の施設を見て回ったり、教授方から学部の説明を多く受けました。また、現地の学生と食事をともにしたりして、交流を多くできました。香港では、私は現地の教授と1対1で面談をすることが出来、私が興味のある分野の話をする事が出来たため、非常に有意義な時間となりました。また、香港科技大学に通う日本人学生と交流することが出来ました。それらの体験を通して、私が強く感じたことは、日本で過ごす多くの学生との意識や語学力の差です。自分にはまだまだ英語の力が足りていないことを実感させられました。教授方からの話が専門的だったこともあります。その話を英語で聞いて理解できたのは6割ほどだったと思います。また、現地の学生との交流でも聞き取れない話があり、日本語で話せる生徒は日本語で話してもらったりしました。しかし、私は自分の語学力がまだまだだとしても、積極的に英語でコミュニケーションをとることを目標の一つにしていたため、そのことに関しては達成できました。それもあってか、今回の研修5日間のうち、最初の方に比べ最後の方は英語を聞き取れる割合や量が多くなったことを実感できました。また、カンバセーションや、リスニングだけでなく、今回の研修では、プレゼンテーションをする機会もありました。国立清華大学と大阪大学の生徒との間で、語学力以上にプレゼンテーションをする能力の差が非常に大きいことを感じました。国立清華大学の学生は、プレゼンテーションをすることに慣れていると感じました。全体的に日本の学生に比べ、アウトプットの能力、機会が異なっていると思います。私自身を含め、日本の学生がアウトプットする機会をさらに増やすことは必要だと思いました。日本の学生も、そのような機会があれば、スピーキング能力が大きく上がると思います。日本では授業のほとんどは、教授が一方向的に話し、生徒が一方向的に聞くだけであり、生徒も大半は携帯を触ったりして話を聞いていません。それは時間の無駄だとおもいますが、それは生徒の責任というより、カリキュラム自体に問題があるように感じます。もっと実践的な授業を増やし、その授業が今後、又は将来どのような形で反映されるのか、役に立つのかを実感できる機会を増やすべきです。そうすれば、学生の意識が上がり、授業はもっと有益なものになると思います。また、今回の研修を通して感じたことは、マスター以上の過程での授業の違いです。私は学部2年生であるため、聞いた話

ですが、大阪大学ではマスター過程に行ってから、授業が国立清華大学や香港科技大学よりかなり多く、実験は少ないと思います。またその授業も、ほとんど大阪大学は日本語であるのに対し、国立清華大学や香港科技大学は半分以上が英語です。このことに、両者での留学生の数や環境での差が表れていると思いました。大阪大学をさらにより良い大学にするためには、海外の大学との協力が必要であり、そのために英語を使った授業を増やすべきだと思います。また、留学生と正規の学生が同じ内容、同じ環境で研究等を行える環境にすべきだと思います。また、私自身も今までと同じような大学生活を送るのではなく、留学生とコミュニケーションをとる機会を増やしたり、学校以外で自分が将来したい仕事に役立つことや関わる事業に積極的に参加することで、限られた大学生活の期間をさらに有益なものにしたいと思います。海外の大学院に行くことや、海外に留学することも視野に、これからの大学生活を過ごしていきたいです。

### 3. 研修から得られた気づきと将来的な目標や夢にどうつなげるか

当初の目標の達成度はかなり大きいと思います。今回の研修で、プレゼンテーションをする機会や、現地の学生、教授と面談などをする機会を通して、自分が将来したいことを真剣に考えるきっかけとなり、自分の将来のゴールを見つけることが出来ました。また、今回の研修を通して、今までの大学生活では決して得ることが出来なかったであろう体験、知識を得ることが出来ました。同時に、英語を実践的に聞き、話すことが出来たため、語学能力やコミュニケーション能力を大きく上げることが出来たと思います。また、今回自分と同じく参加した花木さんや山田さんから、今後の大学生活がどのようなものとなるか、インターンシップがどのようなものかを聞くこともできました。それらの体験を通して、私自身は留学生との交流等を含め、海外に行くことをもっと身近なものにしたいと思います。そして、日本だけでなく、世界全体に視野を広げ、自身の将来の目標である、田舎の地域の活性化のためのシステム作りに向けて、自分が何を学ぶべきか知り、大学院を含め、残りおそらく4年間でそのシステム作りの基礎作りをしたいと思います。そして社会に出て、そのシステムを完成させ実施し、それが今の先進国だけでなく、将来先進国となるであろう今の途上国でもそのシステムが実施されるようにしたいと思います。

私がこのプログラムに応募したのは、自分が所属している地球総合工学科での講義を聴いているだけでは目標を達成することができないと思ったからだ。私の将来の夢はアフリカやアジアなどの発展途上国の社会基盤を整理すること、特に道路からアプローチすることだ。そのために建築・土木を扱う今の学科を志望し入学した。自分の学びたいことを重点的に学べる大学での生活に最初は満足していたが、規模が大きすぎるためにかえって社会基盤が空虚なものに思えてくるという不思議な感覚に陥った。台湾や香港といえは発展途上国ではあるもののその困窮を脱しようとし始めている国だ。他の発展途上国との違いを見せ始めたこの両国ではどのような道路、橋、建築物が作られているのか、このテーマを胸に抱き、インターネットやテレビではわからない細部を実際に自分の体で感じたいという思いで渡航した。

結果から言えば、私の目標は渡航前より具体性を帯び、机上の空論なのではないかとも思えたこれまでの勉強に価値を見出すことができた。台北空港から清華大学に車で移動する間の時間も自分にとっては勉強だった。窓から見えた街は木と建物が混在し、その場その場の思い付きで気ままにつくられた建物たちから形成された秩序のない街並みは発展途上国であるという事実を強く思い出させた。発展途上国に生活に余裕のない人が多いことは周知の事実であるが彼らはその問題を個々で解決しようとし、行き当たりばったりとも言えるような人生を送っているのだろう。一方、先進国は国民から税金を集め福祉、教育、社会基盤などという形で国民に還元するというシステムを確立させ、全体のバランスをとれる人間、秩序ある国をつくれる人間が存在する。この人間がいるかどうかが大変なところで、いないと私が見たような風景が形成される。発展途上国を助けるためには、まず先進国の有識者を届けられる環境をつくること、有識者が必要とする物資を届けられるレベルの道路をつくる必要がある。いくら助けたくても道路がない、または狭かったり荒れていたりするために人やものを運ぶことができない国はまだたくさん存在する。道路をつくることは日本が世界中の発展途上国を助ける足掛かりとなるだろう。

もうひとつ渡航前に目標にしていたことがある。積極的に外国の人とコミュニケーションをとろうということだ。発展途上国の道路をつくることを考えたら現地に行って現地の人と話すことは避けては通れない。実際に台湾と香港にて英語で会話してみると彼らのスピーキング能力の高さに驚いた。英語にあまり触れない日本での生活を続けると海外で働くことなんてできるわけないと焦りを覚えた。しかし、私が今回のプログラムで学んだのはそんな悲観的なことだけでない。構造が正しい英語でなくても伝わるとのことだ。たくさんの人と英語で会話したが私の少しおかしな英語でも理解してくれたしむしろ会話のテンポが良くなり、会話を弾ませることができた。結局はコミュニケーションツールにすぎないのだからその精度よりリズムを大切にしようという考えはあながち間違っていない気がする。だが、構造上正しい英語が話せたほうが良いに決

まっているのでテンポを重視しつつ正確な英語を実際に発話して練習していくのがこれからの課題であろう。

今回のプログラムにともに参加した他の三人にも社会で活躍できる人間になるためのヒントをたくさんもらった。企画して下さった大学の教授方、支援して下さった企業の方々、そして目標は違うけれど熱い気持ちを持って一緒に学んでくれた三人の仲間たちに心から感謝している。



写真左が山田、中央手前が中田、奥が花木、右が出戸